
The Brave is warm-hearted.

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Brave is warm-hearted.

【ノード】

N8278E

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

優しい勇者は誓う。『この世の中を貰へするつて。

俺はピーシアさんに嘘をついた。

俺の家族は生きて地底で暮らしてゐるつて。

心配かけまいと思い口からでもかせを言つた。

後悔しても遅かった。

ピーシアさんは安堵の表情を浮かべたから。

本当は俺は復讐の鬼みたいになつていて。

あなたに会うまでは。

魔族は根絶やしにするべきだと勇んでかねてから噂の在つたあなたの所に来て。

あなたの寝顔をかいてやううと本当は思つていた。

だけどあなたは全然生き延びる事に無頓着で。

むしろ死に急いでるよう見えて。

あなたの部下のリクみたいに無鉄砲に俺の聖剣に触らないで。

そして何より俺の目の前で眠つたんだ。

薄い茶色の瞳を閉じて。

あなたは静かな寝息を立てた。

俺は寝たふりをしてあなたの様子を伺つていたんだ。

リクという従者を失つて。

俺を殺そうとするんだろうと思つていたから。

だから敢えて隙を造つてやつたんだ。

そしたらきっと本性が判るだうつて。

そして何より眠つた振りをした俺にケツトをかけてくれた。

それは手作りのあなたが生業にしてるパッチワーカーのものだった。

俺の頭にこだまする。

あなたが言った言葉。

「…私は無理に生きよつとは思わないし。

貴方に刺されるのが本望だと思つ。

だけど未練が残る。」

何の未練？

そう問うとあなたは苦笑いを浮かべ。

「救えるものを救えなかつたという未練。」

あなたは確かにそう言つた。

俺はあなたのその言葉を反芻して。

斬るのを止めた。

あなたは驚きの表情を浮かべてたね。

だつて俺は決めたんだ。

あなたを何があつても守るつて。

守つてみせるつて。

死に急いでるあなたを斬るのはごく簡単な事で。

聖剣をふりあげてもあなたは瞳を閉じて抵抗すらしないだろつ。

あなたが抵抗するのはただ抱きしめた時だけ。

苦しげな表情で腕を懸命に張るんだ。

…何か工口親父みたいだけど。

俺はあなたを抱きしめたいつて思つたんだ。

聖剣を手に入れて 2

俺の町はもう半年近くになるだろうか。
魔族の襲来で壊滅状態に陥った。

俺が生き残ったのは両親のお陰で。
両親は俺を井戸に隠し言つた。

「お前だけでもどうか生き延びて。」

その悲痛な叫びは断末魔の声と共にかき消された。
だつてその時魔族は言つたんだ。

「人間を根絶やしにしろ。勇者が現れる前に殺すんだ。」

俺の住んでた町は勇者が現れて聖剣を突き刺して逝つた町だと言わ
れてる。

聖剣は伝説通り町外れの噴水に突き刺さつていて。
古びていて。
でもその隣りに石碑があつた。

「これを抜けた者を次代勇者と認める。」

毎年15になつた者が力試しのために聖剣を抜く行事があつた。
でも今まで誰も抜けた者はいない。

そして俺は。

俺はまだ5歳で。

聖剣のある場所にすら行つた事もなく。
まさか自分が抜けるだなんて思いもしなかつた。

俺は両親を殺されて。

魔族が去つてから途方に暮れ。

フラフラと町外れまで行つたんだ。

この辺に優しかつた兄ちゃんの家があつて。

この辺に花売りの美人の姉ちゃんが住んでて。

5歳の俺は子供の思考で。

ただただどうしていいか判らずに、
聖剣を抜いたんだ。

その時目映い光が聖剣から刺して。

俺は急激に大人の体になつた。

まるで天から光が降つてゐみたいに。

俺は聖剣を握り締め。

余りの状況に立ちすくんだ。

そして声が聞こえた。

「さあ。来なさい。私たちの元へ。」

その声を聴いた瞬間俺の意識は遠くへと……。

変な話だけど幽体離脱っていうの？
そんな感じで俺の意識は遠く遠く離れた場所に飛ばされた。
あの声は何だつたんだろう？
そう思いながら。

大人になつた自分の体を遙か下へと見ながら。
空を飛んだ。

半透明の自分の姿は自分でも触れないぐらい半透明で。
でも痛覚はあって。
空を劈く風は痛かった。

「此処は何処？」

自分の意識が全くもつて通じない意識が全く働かない状態で連れて
こられた所は。

一回だけ父に連れてきてもらつた事のある洞窟だった。

「勇者クーラン。」

声がする。

何で俺の名前知ってるの？とか。

当然の疑問は口から付いて出なかつた。

目の前に現れたのは。

水色の女人の人だつた。

「私はヒーリア。癒しのヒーリア。」

「あなたは誰なの？」

それは当然の疑問で。

でもそれを言う前に。

ヒーリアは僕を抱きしめた。

「勇者…。私はお待ちしてました。こんなに立派な青年が勇者だなんて。」

「ちよつ…。ちよつと待つてよ。」

俺はヒーリアの腕の中で暴れて。
ちよつと何なの??

そう思つた。

「俺は今まで5歳の子供で。」

言いながら自信がなかつた。

俺の声すら声変わりして低い男の声になつていたから。

「両親が死んじやつたし。ビうじて良いか判らなくて…!」

堰を切つたかのように涙が溢れた。

俺は別に勇者になりたかったわけじやなかつた。

両親と皆で精一杯仲良く暮らせればそれは凄く幸せな事だし。

「…知つてたよ。勇者クーラン。

あなたが向かう闇も見える。」

ヒーリアはそう言つて。

俺みたいに涙を流した。

「私はね。あなたに伝えたいことがあつたからあなたを呼び寄せたんだ。」

「クーランが5歳の子供なりきっとわからないだろ?」
ヒーリアは俺を抱きしめたまま呟くように言葉をつむぐ。

「お父さんとお母さんが愛し合ってクーランは生まれてきたの。判る?」

俺が涙を拭いながら頷く。

それを確かめながらヒーリアは続ける。

「私は十数年前に可愛い可愛い赤ちゃんを生んだの。」

「それがどうしたの?」と視線を向ける。

「でもね。私の旦那さんって言つのは……悪い奴だったの。」

ヒーリアは悲しそうに。

俺の髪を撫でた。

「悪い悪い魔王だったの。」

ヒーリアは俯いて。

「魔族はね。人間が大嫌いだから殺したいんだけど。

魔王だけはちょっと違つて私を苦しめるために子供を生ませたの。」

「だけど昔から訊いてた話は魔王は何処かずっと遠くで先代勇者に封印されてるって?」

「そう言つとヒーリアは黙つて頷いた。

「さうよ。でもね私のこと魔王は好きなわけじゃなかつたから子供だけ連れて行つてしまつた。

「私はそこで魔族に殺されたわ。」

俺が驚いて見ると。

ヒーリアには足がなかつた。

「そうよ。私は血だらけで赤ちゃんを返して欲しいって願いながら殺されたわ。

私の旦那は魔王ルシファー。そしてその赤ちゃんが大きくなつてから勇者に封印されたの。」

「どうして？」

だつて俺を呼び寄せて。

あなたは何でも見えるつて。

「私は無念しか遺せずに死んだわ。

でも気付くと癒しの魔法を使えるようになつてたの。

それは勇者クーランに魔法を教えるため。まだ死ねないつて。」

俺が見つめると。

ヒーリアは手をかざした。

「あなたがちゃんと自分の年齢に追いつく思考になるまで修行をつけてあげるから。」

そしてヒーリアは俺に牙を向いた。

フェリシティ

「俺は思わず聖剣を握んだ。
それは咄嗟の事だった。

「勇者クーラン。あなたの名前私が知ってるの不思議だと思わなかつた？」

俺に攻撃を仕掛けながら。

ヒーリアは言つ。

俺は必死で避けながら言葉をつむいだ。

「知つてるから知つてるんでしょう？」

俺は確かに名前を呼ばれたとき驚いたけど。

それ以上に自分が光を受けて大人になっちゃつて。

両親は殺されて自分だけ生き残つて。

聖剣を抜いて。

驚く事ばかりで。

どうして問える？

俺の疑問はただ一つ。

俺がどうして勇者になってしまったのかつて事。
俺だけどうして生き延びちゃつたかつて事。

「魔族に殺された人つて人一倍未練が強くて。
だからあなたが生まれるのをずっと待つてたんだ。

先代勇者が残した言葉に次の勇者はクーランって名前だつて。
だから。」

「随分とはた迷惑な話ですね。

俺の運命はもうその時から決まってたんだ。

両親が殺されるのも俺だけ生き延びる事も全部判つてたんだ。」

自嘲の笑みがこぼれる。

「生まれてなんか来なければ良かつた。」

そして叫ぶ。

どうして俺だけ。

どうして俺だけこんな辛い思いをする？

どうして俺だけこんな嫌な思いをする？

「俺が此処で死んだら呪縛から解放される？」

そう呟いて俺は聖剣を自分に刺した。

ヒーリアは泣いていた。

涙を拭いもせず。

ただ俺を見つめていた。

苦しかつた。

辛かつた。

もうどうでも良かつた。

初めは復讐に燃えたけど。

所詮叶わない夢なんて追いかけないほうが絶対良い。
傷つくこともないし。

そして初めから諦めてれば辛い事だつてないはず。

自分で刺した傷はどんどん癒えていく。

「あなたは死ねないから。」

ヒーリアが近づいて。

魔法をかける。

綺麗な水色の魔法。

「この魔法ヒーリアって言うんだ。

私の人間だつたころの名前はフェリシティ。よく覚えていて。

」

そこで記憶は途切れた。

ラピスラズリ

気づくと俺は町外れの森の入り口に佇んでいた。

此処は魔族の巣窟だ。

近所の兄ちゃんが言ってた。

よく町の人が殺されるから近づいたやいけないと。

俺の自分で刺した傷は跡が残つていて。

それだけであれが夢じやない事を悟つた。

あの水色の女のは。

未練だけで生靈になつていた。

そして。

俺に未来を託した。

どうして俺だけ？

今でもその思いは消えないけど。

いつもして生きてる以上何かを残さないといけないと思つ。

勇者の剣を抜いた以上。

何かを背負つて生きていかなければならぬ。

「じつちよ。」

俺は声に導かれ。

ピーシアさんのアジトに着いたんだ。

そして驚いたのはピーシアさんが口笛で呼び寄せた飛竜の名前が。

「フーリシティ」だったこと。

そしてピーシアさんは生き急いでいて。
でもこの小さな飛竜に情けをかけ。
名前を付けた。

フェリシティって幸運って意味。

一体どんな思いであなたはこの子に名前を付けたんだり？
人間になりたかったあなたは口付けて最後の別れを言った。

人間になりたかったあなたは紫色の血を流し。
俺に刺された。

俺の腕の中で絶命をする瞬間に微笑んだ。

「私も人間に生まれたかった。」

「でもこれで未練を残さずに死ねる。ありがとう。勇者クーラン。」

俺はね。最初から知つてたんだ。
ヒーリアのお陰でヒーリアの残した娘がピーシアさんで。

魔王を継承して。

だけど一言だつてピーシアさんには言わなかつた。

魔王はあなたですねつて。

それはあんまり酷過ぎるから。

だから氣づかない振りをして。
出来ない約束をした。

「ピーシアさん。この旅が終わつたら見せたいものがあるから一緒に来てください。」と。

あなたは判つた振りをして頷いたね。

本当は。

そんな日が来ない事も知つてたね。

俺は辛くなかった訳じゃない。

涙は枯れてしまつぐらい泣きたかった。

だけどあなたの生き様を見ると不思議と泣いてる場合じゃないって
て思つたんだ。

どうかあなたの優しく心を痛らせて。

その伝説で生まれた宝石がラピスラズリだと言つ。

ラピスラズリ（後書き）

クーラン編終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8278e/>

The Brave is warm-hearted.

2010年10月17日05時06分発行